

令和6年12月～令和7年1月の現況と2月の対策（果樹）

12月の実況（1月実況は次月掲載）

期間を通して冬型の気圧配置や低気圧の影響で雨や曇りの日が多く、下旬は強い寒気が流れ込んだ影響で、大雪となった所もあった。

福井では、平均気温は5.4℃と平年差-0.5℃と低く、降水量は481.0mmと平年比158%とかなり多く、日照時間は47.6時間と平年比66%と少なくなった。最大瞬間風速が15m/s以上の強風は、8、14日に記録された。

[以上、福井地方気象台の観測データに基づく]

1 ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

園芸研究センターにおける「紅サシ」短果枝の花芽密度(個/cm)は1.70であり、前年の2.09、平年の1.86より低かった。「剣先」は2.13、「新平太夫」は1.34で平年より高く、「福太夫」は1.36で平年より低かった(表1)。

1月16日現在の「紅サシ」花芽重(100芽)は2.15gで、前年の2.97g、平年の2.72gより軽い(図1)。平年の気温データによる予測で開花始期は3月13日となり、前年より39日、平年より17日遅い(表2)。

表1 園芸研究センターにおけるウメの花芽密度（個/cm）

年度	紅サシ			剣先			新平太夫			福太夫		
	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝	短果枝	中果枝	長果枝
2025	1.70	1.27	1.12	2.13	1.38	1.12	1.34	1.07	0.88	1.36	1.25	1.17
2024	2.09	1.25	0.98	1.77	1.16	1.04	1.07	0.95	0.80	1.48	1.14	0.98
2023	2.02	1.05	1.21	1.69	1.18	1.21	1.33	0.97	0.81	1.44	1.18	1.15
2022	1.80	1.30	1.10	1.68	1.05	0.98	1.35	0.93	0.78	1.29	1.04	0.67
2021	1.70	1.15	1.18	1.28	0.94	0.83	1.21	0.80	0.66	1.52	1.04	0.82
平年値（2015-2024）	1.86	1.26	1.09	1.60	1.13	1.03	1.29	0.97	0.83	1.48	1.20	1.00

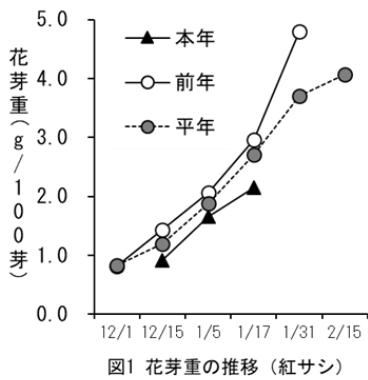


表2 園芸研究センターにおける花芽重（紅サシ）(g/100芽)

年度	調査日						開花始期
	12/1	12/15	1/5	1/16	1/31	2/15	
2025	0.91	1.66	2.15				(3/13)
2024	0.82	1.43	2.07	2.97	4.80		2/2
2023	0.94	1.25	1.65	2.65	3.25	4.21	2/27
2022		1.31	1.55	2.73	3.19	3.69	3/6
2021		1.17	1.60	2.01	3.08		2/15
平年値（2015-2024）	0.83	1.20	1.89	2.72	3.70	4.08	2/19

(2) 地域状況

全体的に花芽密度は平年並みであるが、短果枝の着生は少ない。花芽の生育は、平年に比べ2週間程度遅い。

2 ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

農業試験場における「幸水」の自発休眠覚醒は12月26日で前年と比べ2日、平年と比べ1日早くなっている。移行期を経て、2月上旬頃に他発休眠期に入る見込である。他発休眠期以降は、気温が高い日が多いほど発育が早まる。

(2) 地域状況

せん定作業が順調に進められている。

3 カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

数回降雪があったが、積雪は少なく、特段の被害は発生していない。

(2) 地域状況

せん定作業が順調に進められている。

対 策

1 各樹種共通

(1) 樹体の雪害対策

降雪中は園内を見回り、枝に付着した雪を払い落とし踏圧する。雪に埋まった樹や枝は、放っておくと融雪時の沈降により裂開するので、すみやかに掘り出す。ナシ棚などに冠雪した場合には、早急に払い落とす。

(2) ハウスの雪害対策

ブドウやイチジクなど果樹においてもハウスの導入が増加しており、高価な施設を雪害から保護するために十分な備えが必要である。

巻き上げ式の天井ビニールは、確実に巻き上げて積雪可能部分が少なくなるように点検しておく。10年に一度の豪雪にも耐えられるよう、丸太や竹、パイプなどの補強資材をハウス内かその近辺に確保しておく。また、除雪の方法について事前にシミュレーションしておく。

(3) 穂木の採取

春季に苗木養成や高接ぎの計画がある場合は、2月初めまでに穂木を採取しておく。

穂木は、病虫害やキズのない健全な1年生枝(新梢)を採取する。

採取した穂木は、鮮度を保つために、大きなポリ袋や農業用ビニールフィルムに包んで密封し、5℃以下の冷蔵庫内で凍結しないように注意しながら、接ぎ木時期まで保管する。

2 ウメ

(1) ミツバチ巣箱の設置

結実の良否は、貯蔵養分、花質、開花期間の気象条件などの要因で決まる。結実率を高めるためには開花期間中の交配用ミツバチの放飼が必要である。

ミツバチ巣箱は、風当たりの弱い場所を選んで置き、出入口を南側へ向け、若干の下り勾配にして中に雨水が入らないように設置する。巣箱の外でミツバチが活動している間に、巣箱の位置や方向がわずかに変わっても、ミツバチは巣箱へ帰還できなくなるので、設置後は絶対に巣箱を移動させないように注意する。また、巣箱の設置中は薬剤散布をしない。

雪が降り積もったら、出入り口の前1m四方の除雪を行い、着陸場所の確保を行う。

(2) 休眠期防除

開花始期(チラホラ咲き)が石灰硫黄合剤の散布適期であるが、今シーズンは開花が早まっているので、今年は2月以降に石灰硫黄合剤を散布しない。ウメシロカイガラムシが多数寄生したことによるこやぐ病が見られる園地では、4月下旬から5月上旬頃にふ化する第1世代幼虫に対する薬剤散布を実施できるよう、今シーズンの防除を計画する。

(3) 石灰質資材の準備

ウメは石灰(カルシウム)の吸収が多い樹種である。石灰質資材(苦土石灰やセルカなど)は10月と3月に80~100kg/10aずつ施用する。芽出し肥とは1~2週間程度あけて施用する。

(4) 芽出し肥の準備

3月になると芽出し肥の施用時期となるので、今から準備しておく。芽出し肥は春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために必要である。

3 ナシ

(1) 整枝・せん定

せん定を終了していない園では、せん定作業を急ぐ。

主枝は3本とし、それぞれに亜主枝を2~3本配置する。亜主枝は1.8~2.0m間隔で、亜主枝どうしは並行になるように配置する。主枝、亜主枝の先端は棚面から40cm程度の高さで切返す(図2)。

側枝は主枝・亜主枝の両側にそれぞれ40cm間隔で配置する。年数の経った側枝では果実品質が低下する可能性があるため、3~4年生以上の長大化した古い側枝は、原則としてせん定して新しい側枝に更新する。また、1㎡当たり1~2本程度の予備枝を残し、さらに翌年度以降の着果確保を計画しておく。

せん定が終了したら誘引作業を行う。主枝・亜主枝の先端は強く伸びるように立てる。側枝と主枝、亜主枝の角度は90°を基本に、棚面がまんべんなく埋まるように側枝を配置する。また、側枝は棚面に水平に誘引する。

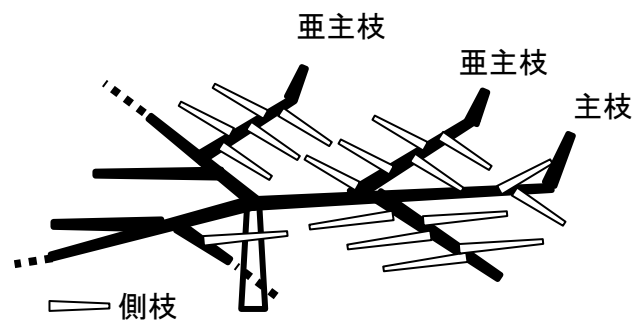


図2 枝の配置説明

4 カキ

(1) 整枝・せん定

10年生以上の成園で、隣接樹と枝が交差して過密状態になっている場合は、樹勢を考慮しながら縮間伐を実施する。縮伐樹では、大きな枝の分岐部から間引きせん定を行い、永久樹との枝先間隔を1m程度空けるようにする。

骨格枝の先端部は、樹全体の樹勢維持のため必ず切り返しを行う。亜主枝は1主枝当たり2本程度にして、亜主枝上に側枝をまんべんなく配置する。主枝から出ている他の太枝は整理し、骨格枝への日当たり改善をめざす。炭疽病などのり病枝は、せん定で取り除き越冬菌密度の低下をはかる。

(2) 病虫害防除

せん定後の3月に、主幹部を中心に粗皮削りを実施し、生育期の病虫害の発生を抑制する。カイガ

ラムシ類の越冬個体数が多い園では粗皮削りを行う。高圧洗浄機を用いて、樹体に高圧水を噴射する方法は作業能率が高い。

5 イチジク

(1) ハウスの管理

イチジクは休眠が非常に浅く、冬期間でもハウスを密閉して温度が上がると、早くから樹液の流動が活発になり、春先の戻り寒波によって寒凍害を受けやすくなる。そのため、ハウス内の温度が15℃以上にならないよう、晴天日の昼間はハウスを開放し、温度上昇を防ぐ。

また、土壌の水分状態を確認し、乾燥してきたら適宜かん水を行う。

(2) せん定

せん定作業は厳寒期を過ぎた3月上旬に行う。前年に伸びた結果枝の基部2芽を残して切る。

6 ブドウ

(1) 芽傷処理

昨年伸びた新梢を長く残す場合(特に若木の時は長く残す場面が多い)、前年にせん定した位置から3～4芽しか発芽しない場合があるため、必ず芽傷処理を行う。芽傷処理は、樹液が動き出す直前(2月下旬頃から3月上旬)に行い、各芽の先5～10mmの位置に、深さ2mm程度で長さ5～10mmの傷を入れる。ノコギリで芽傷をつけることも可能だが、ブドウ専用の芽傷鋏を用いることで、迅速で適切な処理が可能になる。

(2) ハウスの管理

ブドウは休眠が浅いので、ハウスを密閉したままだと早期に芽が動き出してしまい、春先の戻り寒波によって、寒凍害を受けやすくなる。保温を開始するまでは、ハウスはできる限り開放して温度上昇を防ぐ。

周年被覆の場合は、定期的に土壌の水分状態を確認し、乾燥しないように適宜かん水する。特に、樹液が動き始める2月下旬頃からは、土壌が十分に湿った状態を維持する。